

令和元年5月28日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21149

研究課題名(和文) 1770年代から1830年代におけるガイスト概念の変遷 ゲーテを中心に

研究課題名(英文) Goethe's Concept of "Geist" in the History of Ideas (1770's-1830's)

研究代表者

久山 雄甫 (Hisayama, Yuho)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70723378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：ゲーテは神学・哲学・自然科学の各文脈で、それぞれガイスト概念を「雰囲気」との関わりから再解釈した。なかでも時間論的枠組みにおけるガイスト概念の用法は注目に値する。彼のガイスト概念には、全体性の理想と結び付いた過去や未来の表象が、時間的なずれによって直接的に知覚されないがために、かえって深層と表層の現在的な重なりにおいて知覚されるようになるというパラドクスが確認できる。そうした現在の深層＝表層は、彼の著作で繰り返し雰囲気的に表現されている。ただし晩年のゲーテ作品においてはこの逆説構造そのものが戯れに満ちた自己批判を伴って語られるようになり、その輪郭はますます曖昧になっていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ゲーテは過去や未来を時空間的な全体性との関連から捉え、物質的にはもはや/いまだ存在しないはずの過去や未来の存在も「ガイスト的(霊的/精神的)」現在として看取しようとしていたことが分かった。こうしたゲーテのガイスト観は、人間が生きる世界において、存在と非在の区別が実は流動的でありうることを示す(たとえば記憶や想像は存在か非在か)と同時に、人間の世界認識において「時」と「雰囲気」が果たす役割を解明するための手がかりとなる。

研究成果の概要(英文)：In this research project I collected and analysed Goethe's usages of the German word "Geist" from his early theological thesis (Zwo Biblische Fragen, 1773) and Urfaust (before 1775) through his morphological research (1780's-1820's) to his latest works as Wilhelm Meisters Wanderjahre (2nd version, 1829) and Faust II (1831). As a result, I found a paradoxical structure in Goethe's temporized concept of Geist: He saw the past and future as an "atmospheric" glance of presence of Geist, which in his terms cannot be grasped by itself, but only as an indirect phenomena such as in atmospheric manner. The latest works show furthermore the ironical and mystifying usage of the term "Geist", which can be understood as a playful self-reflection of old Goethe.

研究分野：近代ドイツ思想史、日欧比較文化論

キーワード：ゲーテ ガイスト プネウマ 形態学 雰囲気 時間論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景をなしていたのは「雰囲気思想史」の叙述という目標である。自然の崇高さにせよ、変動する社会の空気にせよ、あるいは家庭や故郷の安らぎにせよ、人間はつねに雰囲気のなかで生きており、しかもそこに生の基盤を感じ取ることも少なくない。それゆえ雰囲気をめぐる思考は——個人・主体や社会・共同体をめぐる思考とならんで——人文学の諸分野できわめて重要な役割を果たしうる。それにもかかわらずこのテーマは、部分的にはハイデガー、ボルノウ、テレンバツハ、バシュラールらが限定的な視角から話題にしてきたものの、ヘルマン・シュミッツが創始した「新現象学」のアプローチ(1970年代)以前には哲学的に基礎付けられてこなかった。シュミッツ哲学に依拠する「雰囲気現象学」は、20世紀末から今日にかけて、あたかも堰を切ったかのように環境倫理学、技術哲学(AIやVR)、人間関係論、精神医学、群集心理学、マーケティング論、都市デザイン、建築学、文化比較論など多岐にわたる分野で注目されてきている。

しかしながら思想史研究からのアプローチは不十分である。雰囲気は、さまざまな時代と地域における人間の自己理解・世界理解・生命理解に依拠して、いかに捉えられてきたのか。これについて(地域と時代をまたぐ)一般性と(地域と時代で異なる)特殊性を探る作業は、雰囲気というテーマが人文学に根付こうとしている今日、ますます必要性を増している。

2. 研究の目的

上記の文脈において、本研究代表者がこれまで注目してきたのがドイツ語の「ガイスト(Geist)」である。この概念は非常に多義的であり「精神」や「霊」のほか「精気」「生氣」「雰囲気」「酒精」などに翻訳されうる。近代ドイツ語圏では、古代ギリシア語のプネウマやラテン語のスピリトゥスの訳語としても使われ、もともとのゲルマン語における「驚愕(させる霊的存在)」の意味とともに、風や息吹の原義に由来する雰囲気のイメージを内包してきた。

つまり「ガイスト」は文脈によって、主体の内面に位置づけられる「精神」でもあればその主体の周囲に茫洋と漂う超個人的な「雰囲気」でもありうる。「霊」の意味は往々にしてそれらの中間に位置づけられる。雰囲気を思想的テーマとして考察する際には、複数の二元論(客体と主体、物体と非物体、実在と非在、個体と集合体)の関係性が問題となるが、こうした意味の多重性からも窺えるように、それらの区分をいずれの場合も越境しうる点でガイスト概念の特異性は際立っている。この概念の近代における歴史的変遷(特にゲーテにおけるガイスト概念)を追うことで「雰囲気思想史」の要諦をなす問題系に光を当てることが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

この目的のため、本研究ではゲーテのガイスト概念を中心的に扱った。現象そのものの「繊細な経験」を重視したゲーテは、いわゆる近代的世界観のドグマ(主客分離、科学の客観主義、心身二元論など)を妄信することなく、文学・科学・哲学にまたがる独特の世界観を構築した。その思想は「雰囲気思想史」を構想する際にも最大級の注目に値する。本研究は、ゲーテのガイスト概念を「雰囲気思想史」の観点から考察するという方法をとることで、独自の観点から近代ドイツ語圏で起こった世界観・人間観・生命観の根本変化の一側面を明らかにしようと試みた。具体的には、ゲーテのガイスト概念の用法を調査

する文献学的な作業を基礎として、そこから特に注目すべき用法を絞り込み、下記の3点について、主に思想史的観点からの考察を行った。

4. 研究成果

研究成果をここでは便宜的に以下の3つに区分し、それぞれ主な論文(すべて単著、査読あり)を挙げて説明を加える。なかでも(2)の時間論的な研究成果が重要であると思われるため、上記「研究成果の概要」などでは、ここに重点を置いた記載を行った。

(1) ゲーテの神学・哲学・自然科学におけるガイスト概念

若きゲーテは神学論文で聖霊(ドイツ語では「聖なるガイスト」)を重視したが、次第に神や聖霊といった「言葉をこえた、雰囲気としてのみ感知される存在」に科学的言語で間接的に近付こうとするようになった。この過程を「ヌースか、 Pneumaか? —若きゲーテのガイスト概念と聖霊、悪魔、科学」『DA』第12号(2017年)36-53頁で明らかにした。また、ゲーテ形態学においてガイスト概念は息吹および想像力と連動し、主客のあいだで「うごき」を見せる生命原理を表すが、その思想史的背景が古代ギリシア語Pneumaの語義にある可能性を「形態学と想像力——ゲーテのナマケモノ論における「詩的表現」の意味」『モルフォロギア』第38号(2016年)59-88頁で示した。

ゲーテ思想の哲学的な背景としては、従来スピノザ主義が重視されてきたが、本研究ではむしろ新プラトン主義のダイナミズムにガイスト概念との関連で注目した。特にゲーテがプロティノス哲学に対する批判を通じて、「理念」とならんで「現象」をも重視する自らの思想的立場を明確化したことを「色彩としての生命——ゲーテの自然観とプロティノス批判」『モルフォロギア』第40号(2018年)35-59頁で論じた。理念と現象の双方を重視するこの姿勢は、天上的な理念が地上に現象する場合の「雰囲氣的な」あり方への注目の基礎をなす。さらには、新プラトン主義を秘教的に発展させた哲学者トロクスラーに対して、ゲーテが一方では烈しい批判を行いつつ、他方では彼のガイスト概念を巧妙に自身の形態学に引用していたことを以下の論文で具体的に示した。Warum Goethe I. P. V. Troxler zitiert: Zum Geist-Begriff im morphologischen Kontext. In: Harald Schwaetzer (Hg.): *Natur und Geist*. Reihe Philosophie interdisziplinär, Regensburg: S. Roderer 2019. (所収・刊行決定済。)

(2) ゲーテの時間論および歴史観とガイスト概念の関係

自然界の「うごくかたち」に注目する形態学を創始したことから窺えるように、ゲーテはしばしば過去と未来の時間相を「現在」において複層的に直観しようとした。本研究ではこの態度に注目し、「雰囲気」として感知される複数の時間相の重なりが、文学作品の中では幽霊的なガイスト(特に『ファウスト第二部』のヘレナ)の顕現としても見られることを「ゲーテの「現在」概念——『ファウスト第二部』ヘレナ劇の解釈のために」『ドイツ文学論攷』第58号(2016年)5-23頁で主張した。同様に「雰囲氣的」で「ガイスト的な」ヘレナの雰囲氣的な描写については国際独文学会(上海大会)でも発表し、その内容を論文化して *Das phantasmagorische Doppelreich der Geister. Zum atmosphärischen Helena-Bild in Goethes Faust II.* In: Jianhua Zhu, Jin Zhao und Michael Szuraqitzki (Hg.): *Germanistik zwischen Tradition und Innovation*, Bd. 12, Berlin u.a. 2018, S. 219-224 として発表した。

ただし、本研究では同時に、ゲーテはすべての時間相を大きな「歴史」に回収することには否定的であり、ゆえに大きな物語としての世界史の叙述にはあえて「挫折」したことも明らかになった。この顛末とその思想的背景を「薔薇十字的世界史の挫折——ゲーテの『秘密』と1780年代」『DA』第11号(2015年)71-88頁で示した。

(3) ゲーテ(特に晩年)の文学作品におけるガイスト概念の用法

特にゲーテ晩年の文学作品では、「ガイスト」の語を使って、曖昧な実体性しかもたない霧困氣的/霊的な存在がしばしば描かれることが分かった。そのうち上記(2)で挙げたヘレナとならんで重要な文学的形象が、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に登場する謎の女性マカーリエである。本研究では特に「エンテレケイアのように」で「ガイスト的」と言われる彼女の描写に注目し、ふたつの論文(「モナド・エンテレケイア・マカーリエ——ゲーテにおける「個の不滅」の問題」『モルフォロギア』第37号(2015年)49-77頁および *Krankheit, Spiegel und Hoffnung. Makarie als eine „geistige“ Figur in Goethes Wilhelm Meisters Wanderjahre*, in: Gernot Böhme (Hg.): *Über Goethes Romane*. Bielefeld 2016, S. 69-79)で、マカーリエ形象の実体性の儚さを思想史のなかに位置づけた。これはすなわち、ゲーテにおいてガイスト概念は往々にして実在と非在のあわいを指し示す語として用いられているということである。これに関してさらに、ゲーテ晩年の詩「一と全」「遺言」で使われる「世界ガイスト」の語が、神的なものに到達できない言語の限界を示す空所を表していることを、次号の『ゲーテ年鑑』に掲載される最新論文 *Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht Eins und Alles*, in: *Goethe-Jahrbuch* Bd. 135, 2018 (掲載決定済、2019年発行予定)で主張した。ここには晩年のゲーテの自己批判を伴った戯れが見られる。

その他、以上に挙げた3つのテーマに関して、口頭での研究発表を日本、ドイツ、中国などで15回行った。特筆すべきは、2017年6月に国際ゲーテ協会の若手ゲーテ研究者シンポジウム(隔年開催で世界中の若手ゲーテ研究者の登龍門)に招待され講演を行ったことである。この発表内容は論文化され、先述の *Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht Eins und Alles* として『ゲーテ年鑑』次号に掲載されることになった。その他の口頭発表については以下の項目5に挙げる通りである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

Yuho Hisayama: *Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht Eins und Alles*. in: *Goethe-Jahrbuch* Bd. 135, 2018, auf Deutsch.

久山雄甫「色彩としての生命　ゲーテの自然観とプロティノス批判」『モルフォロギア』第40号(2018年) 査読あり、35-59頁、日本語。

久山雄甫「ヌースか、 Pneumaか?　若きゲーテのガイスト概念と聖霊、悪魔、科学」『DA』(神戸大学ドイツ文学会)第12号(2017年) 査読あり、36-53頁、日本語。

久山雄甫「形態学と想像力　ゲーテのナマケモノ論における「詩的表現」の意味」『モルフォロギア』第38号(2016年) 査読あり、59-88頁、日本語。

久山雄甫「ゲーテの「現在」概念　『ファウスト第二部』ヘレナ劇の解釈のために」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会)第58号(2016年) 査読あり、5-23頁、日本語。

久山雄甫「モナド・エンテレケイア・マカーリエ　ゲーテにおける「個の不滅」の問題」『モルフォロギア』第37号(2015年) 査読あり、49-77頁、日本語。

久山雄甫「薔薇十字的世界史の挫折　ゲーテの『秘密』と1780年代」『DA』(神戸大学ドイツ文学会)第11号(2015年) 査読あり、71-88頁、日本語。

[学会発表](計15件)

Yuho Hisayama: „*Ki, pneuma und Geist. Möglichkeiten ihres transkulturellen Vergleichs.*“ ENOJP

第4回大会：ワークショップ「Transforming the Bodymind: Towards a Phenomenology of Ki 気 and Kata 型」にて。2018年9月6日、ヒルデスハイム大学マリーエンブルク文化キャンパス、ドイツ語（招待講演）。

久山雄甫「色彩としての生命 ゲーテの自然観とプロティノス批判」ゲーテ自然科学の集い：京都例会にて。2018年7月29日、平安女学院大学京都キャンパス、日本語。

Yuhō Hisayama: „Weltseele, Weltgeist und das Unsagbare in Goethes Altersgedicht *Eins und Alles*.“ 人文学国際ワークショップ「Humanities in a Changing World: New Ways, Globalization, Responsibility」にて。2018年4月3日、神戸大学六甲台キャンパス、ドイツ語。

久山雄甫「ヌースか、 pneuma か？ 若きゲーテのガイスト概念と聖霊、悪魔、科学」ゲーテ自然科学の集い：京都例会にて。2018年3月11日、平安女学院大学京都キャンパス、日本語。

久山雄甫「形態学と進化論 シンポジウム導入のために」ゲーテ自然科学の集い：年次総会シンポジウムにて。2017年11月11日、平安女学院大学京都キャンパス、日本語。

Yuhō Hisayama: „Mit der Weltseele, mit dem Weltgeist hinan. Zur Kosmologie des alten Goethe im Gedicht *Eins und Alles*.“ ヴァイマル・ゲーテ協会（国際ゲーテ協会）総会：若手ゲーテ研究者シンポジウムにて。2017年6月7日、ヴァイマル文化センター、ドイツ語（招待講演）。

Yuhō Hisayama: „Weltseele und Weltgeist in Goethes Gedicht *Eins und Alles*.“ ダルムシュタット・ゲーテ協会：講演会にて、2017年6月5日、ダルムシュタット市立文学館、ドイツ語（招待講演）。

久山雄甫「I・P・V・トロクスラーのガイスト概念 ゲーテ形態学との関連から」ゲーテ自然科学の集い：京都例会にて。2016年9月10日、平安女学院大学京都キャンパス、日本語。

久山雄甫「形態学と想像力 ゲーテのナマケモノ論における「詩的表現」の意味」日本独学会東海支部：夏季研究発表会にて。2016年7月9日、名古屋大学東山キャンパス、日本語（招待講演）。

久山雄甫「ゲーテにおける「現在」の概念」阪神ドイツ文学会：研究発表会にて。2016年4月3日、神戸大学六甲台キャンパス、日本語。

久山雄甫「ゲーテの『秘密』はいかにして未完に終わったか」ゲーテ自然科学の集い：京都例会にて。2015年12月5日、立命館大学衣笠キャンパス、日本語。

Yuhō Hisayama: „*Ki, pneuma* und Geist. Möglichkeiten ihres Vergleichs.“ アカデミー・コース特別講演会にて。2015年11月27日、アカデミー・コース、ドイツ語（招待講演）。

Yuhō Hisayama: „Individuum und Atmosphäre. Überlegungen zum Distanzproblem am Beispiel des japanischen Wortes *kūki*.“ トリーア大学・神戸大学合同ワークショップにて。2015年11月25日、トリーア大学第二学群スラブ文学研究室、ドイツ語。

Yuhō Hisayama: „Das phantasmagorische Doppelreich der Geister. Überlegungen zu Goethes Umgang mit dem Ideal-Schönen im *Faust II*.“ 国際独文学会：第13回上海大会にて。2015年8月28日、上海市・同済大学キャンパス、ドイツ語。

Yuhō Hisayama: „In krankem Verfall des Körpers, in blühender Gesundheit des Geistes. Zur Figur der Makarie im Roman *Wilhelm Meisters Wanderjahre*.“ ダルムシュタット・ゲーテ協会：講演会にて。2015年5月25日、ダルムシュタット市立文学館、ドイツ語（招待講演）。

〔図書〕(計4件)

Yuho Hisayama: Warum Goethe I. P. V. Troxler zitiert: Zum Geist-Begriff im morphologischen Kontext. in: Harald Schwaetzer (Hg.): *Natur und Geist*. Reihe Philosophie interdisziplinär, Regensburg: S. Roderer, 2019, auf Deutsch. (頁数未定、掲載決定済。)

Yuho Hisayama: Das phantasmagorische Doppelreich der Geister. Zum atmosphärischen Helena-Bild in Goethes *Faust II*. In: Jianhua Zhu, Jin Zhao und Michael Szuraqitzki (Hg.): *Germanistik zwischen Tradition und Innovation. Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015*, Bd. 12, Berlin u.a.: Peter Lang, 2018, S. 219-224, auf Deutsch.

Yuho Hisayama: Krankheit, Spiegel und Hoffnung. Makarie als eine „geistige“ Figur in Goethes *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. In: Gernot Böhme (Hg.): *Über Goethes Romane*. Bielefeld: Aisthesis, 2016, S. 69-79, auf Deutsch.

Yuho Hisayama: *Ki, pneuma* und Geist. Möglichkeiten ihres Vergleichs. In: Akio Ogawa (Hg.): *Wie gleich ist, was man ver-gleicht-t?* Tübingen: Stauffenburg, 2016, S. 83-90, auf Deutsch.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/faculty/yuho-hisayama.html>

http://kuid.ofc.kobe-u.ac.jp/InfoSearch/html/researcher/researcher_R2aYr3rj4fzO-IBQ3mbe3w_ja.html;jsessionid=F0DD895EA4AA0F59B2664DD948B79FCB

(所属する神戸大学人文学研究科HP内の個人ページと神戸大学研究者紹介システム内の個人ページ。本科研費による成果の業績も記載されている。)

6 . 研究組織

研究代表者一名で研究を行った。